



ウラガミ様



川崎ゆきお

「探したら出てきたよ。捨ててなかったんだ」

「それは復活させないとね」

それを探していた三村は都心からのUターン組で、話し相手は故郷の旧友。どちらも旧家だ。

「蔵の一番奥に突っ込まれていたよ。板が何枚も出てきた。ひとまとめにしてね。風呂なんかの焚き付け用の薪のようにね」

「うちのと同じものかなあ」

「そうだと思う。組み立てるのに半日かかったよ。欠けてるものがあるかもしれないけど」

組み立てたのは浅い家のようなものだ。門を開けると、すぐに板一枚で、裏に出てしまいそうな神棚だった。

「奥の板に何か張ってなかったかい」

「剥がしたあとがある。きっと捨てるときに余計なものを外したんだと思う。神様の名前なんか書かれていたんだろ。だから、さすがにそのままでは捨てられなかったんだらうなあ」

「うちもそうだよ。神様を捨てることになるからね」

二人はもう中年を超えているが、子供時代、その神棚があったことをかすかに記憶している。その頃はもう家の者も、その神様を大事にしなくなったのか、置物のようになっていた。

その時期は二人とも共通しているようで、この地域での流行廃りと関係しているのだろう。それほど長い期間ではないと思われる。

「これがウラガミ様だったんだ」

その言葉は、流行らなくなってから、禁句のようになり、家でも耳にすることはなくなっていた。三村は二三度、その言葉を聞いたことがある。

「あとは、趣味だね」三村が言う。

「そうそう、これは今から買いに行っても売っていない。通販で調べたんだが、色々な神棚が売られているんだが、古いのは珍しいよ。それに何処で作ったのか分からない。それは知らないほうがいいんだ。蔵とか物置から出て来た、という感じでね」

「それで、どうするんだ」三村が聞く。

「どうもしないさ。君の言うように、もう趣味なんだなあ」

「何に効くんだらう。ウラガミ様は」

「表の神様では叶わないようなことが叶うんじゃないかな」

「願ってはいけないことを願うとか」

「まあ、そうだろうけど」

「どうして、僕の家にもあるんだろう」

「売りに来たんだよ。流行らせようとした」

「誰が」

「今となっては、分からないなあ。神棚屋かな」

「じゃ、どうして辞めたんだろう」

「ここの神社にばれたからさ。聞いた話だけどね」

「神社って、村のあの神様かい」

「そうそう、氏神様」

「神通力より、地元の神様から嫌われるのが怖かったんだと思う」

三村はその後、組み立てた小さな家のようなものを本棚の上に置いてみたが、特に何かを願うわけでもなく、そのまま放置してしまった。

もっと凄いものだと思っていたのだが、神秘的なイメージが湧いてこなかった。

きっとただの板きれ状態を見てしまったためだろう。

了